

機関名	北海道大学	機関番号	10101	拠点番号	D01
1. 機関の代表者 (学長)	(ふりがなくローマ字) Saeki Hiroshi (氏名) 総長 佐伯 浩				
2. 申請分野 (該当するものに〇印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	心の社会性に関する教育研究拠点 Center for the Sociality of Mind				
研究分野及びキーワード	<研究分野: 心理学>(社会的相互作用)(集団)(社会的認知・感情)(文化)(生態)				
4. 専攻等名	文学研究科(人間システム科学専攻・歴史地域文化学専攻・思想文化学専攻), 教育学研究院(教育学部門), 経済学研究科(現代経済経営専攻)				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)	カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センター Center for Evolutionary Psychology, University of California, Santa Barbara				
6. 事業推進担当者	計 15 名 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [86.7%]				
ふりがなくローマ字 氏名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー)					
Kameda Tatsuya 亀田 達也(52)	文学研究科(人間システム科学専攻)・教授	意思決定科学 Ph.D	全体統括		
Yamagishi Toshio 山岸 俊男(64)	文学研究科(人間システム科学専攻)・教授	社会心理学 Ph.D	研究担当副リーダー, 感情の生態学的基盤研究統括		
Naka Makiko 仲 真紀子(56)	文学研究科(人間システム科学専攻)・教授	発達心理学 学術博士	教育担当副リーダー, 文化の制度的基盤研究		
Takahashi Nobuyuki 高橋 伸幸(42)	文学研究科(人間システム科学専攻)・准教授	社会学 Ph.D	社会行動の適応的基盤研究統括		
Yuki Masaki 結城 雅樹(44)	文学研究科(人間システム科学専攻)・准教授	文化心理学 博士(社会心理学)	文化の制度的基盤研究統括		
Ohnuma Susumu 大沼 進(42)	文学研究科(人間システム科学専攻)・准教授	環境心理学 博士(心理学)	連携活動統括, 研究支援調整室担当, 研究成果の制度設計への適用担当		
Takahashi Taiki 高橋 泰城(38)	文学研究科(人間システム科学専攻)・准教授	神経科学・博士 (理学)	感情の生態学的基盤担当(平成20年12月5日追加)		
Takigawa Tetsuo 瀧川 哲夫(64)	文学研究科(人間システム科学専攻)・特任教授	認知心理学 文学博士	社会行動の適応的基盤研究担当		
Irimoto Takashi 煎本 孝(64)	文学研究科(歴史地域文化学専攻)・特任教授	文化生態学 Ph.D	文化の制度的基盤研究担当		
Utsunomiya Teruo 宇都宮 輝夫(62)	文学研究科(思想文化学専攻)・教授	哲学・宗教学・倫理学・文学修士	哲学・宗教学・倫理学からの「心の社会性」の意味の検討担当(平成21年2月3日追加)		
Murohashi Terumitsu 室橋 春光(62)	教育学研究院(教育学部門)・教授	発達生理心理学 教育学博士	社会行動の適応的基盤研究担当		
Nishibe Makoto 西部 忠(50)	経済学研究科(現代経済経営専攻)・教授	進化経済学 経済学博士	文化の制度的基盤研究担当		
Hizen Yoichi 肥前 洋一(39)	経済学研究科(現代経済経営専攻)・准教授	実験経済学 Ph.D	研究成果の制度設計への適用担当		
Cosmides, Leda(54)	カリフォルニア大学サンタバーバラ校心理学研究科・教授	進化心理学 Ph.D	カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センターにおける教育研究担当		
Tooby, John(59)	カリフォルニア大学サンタバーバラ校人類学研究科・教授	進化人類学 Ph.D	カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センターにおける教育研究担当		
Ishihara Koji 石原 孝二(45)	文学研究科(思想文化学専攻)・准教授	哲学・倫理学 博士(文学)	哲学・倫理学からの「心の社会性」の意味の検討担当(平成20年3月31日辞退)		
Adachi Mayumi 安達 真由美(51)	文学研究科(人間システム科学専攻)・准教授	発達心理学 Ph.D	教育活動支援室担当, 感情の生態学的基盤研究担当(平成20年5月27日辞退)		
Katayama Junichi 片山 順一(51)	教育学研究院(教育学部門)・准教授	生理心理学 博士(文学)	感情の生態学的基盤研究担当(平成21年3月31日辞退)		

機関（連携先機関）名	北海道大学（カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センター）	
拠点のプログラム名称	心の社会性に関する教育研究拠点	
中核となる専攻等名	人間システム科学専攻	
事業推進担当者	（拠点リーダー）亀田 達也	外 14 名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本拠点は、21世紀COEプログラム「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点」の成果を基盤に、その理念を継承し発展させることで、“心の社会性”に関する世界最先端の教育研究拠点の形成を目的とする。本拠点の教育研究活動を支える基本理念は、感情を含めた人間の心理・行動システムが集団・社会環境への進化的適応の所産であるという近年の人類学及び脳科学研究の成果を出発点に、心と社会の間のダイナミックな相互形成メカニズム(マイクロ=マクロ・ダイナミクス)を、進化ゲーム理論と自律エージェント型シミュレーションによるモデル構築、国際比較を含む実験・調査・フィールドワークによる経験的検証とモデルの洗練という一連の研究ステップを展開することで統合的に解明するという視座にある。本拠点計画の核となる北海道大学文学研究科人間システム科学専攻は、こうした基本理念に基づく教育研究活動を21世紀COE発足以前から10年余に亘り強力に展開してきており、国際水準の若手研究者育成及び世界最先端の研究成果の発信の両面において、特筆すべき大きな成果を収めた。本拠点計画の目的は、こうした大きな教育研究成果をあげた当専攻独自の理念と方法をさらに発展・強化し、人間・社会科学の新たな流れに向けて国際的な研究全体をリードし得るトップクラスの若手研究者を生む、世界最先端の教育研究拠点を形成することにある。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>本拠点では以下の拠点形成計画を組織的に展開してきた。これらの計画は順調に進捗し、国際的先端拠点の形成という所期の目的は十分に達成された。</p> <p>1)新しい人間・社会科学の基盤となる“心の本質的社会性”の解明:2つの基軸による展開</p> <p>21世紀COEの目的でもあった“心の本質的社会性”の解明を引き継ぎつつ、さらに深化させる形で、(a)本拠点と方向性を共有する海外主要研究拠点との一層の連携、(b)経済学・政治学などの社会科学領域との実験研究を通じた連携、という2つの基軸に沿った教育研究プログラムを強力に推進する。(a)の海外主要研究拠点との連携についての主要な成果は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校(UCSB)進化心理学センターとの共同教育体制の構築にある。同センターのコスミデス、トゥービー共同センター長が事業推進担当者に加わり、本プログラムの運営を共同で行った。北大・UCSB間の連携は、両拠点の若手が国際的ネットワークを作り第一線の研究者として自ら成長していくための、相互にメリットのあるシステムとして具体化し、北大サイドのみではなく、UCSBにおける若手教育の重要な柱となるに至った。(b)の基本軸に関しては、社会科学系グローバルCOE拠点(大阪大学、早稲田大学)の研究者との間で、科学研究費特定領域研究「実験社会科学—実験が切り開く21世紀の社会科学」を軸とする密接な共同研究教育体制を構築することで、マイクロ=マクロ・ダイナミクスの総合的な展開を図った。</p> <p>2)若手研究者育成のための施策の強化</p> <p>21世紀COEプログラムの成功をもたらした各種の若手研究者育成施策(研究チームを中心とする教育、英語での研究発信能力の育成と国際学術誌への投稿支援、優秀な若手のPD・RA雇用、競争的研究資源配分など)を継続すると共に、海外研究拠点での研究実施のための若手研究者の派遣、合同セミナー・ワークショップの開催、一流研究者及び若手研究員の招聘を通して、若手研究者による国際的研究発信能力を一層強化した。同時に若手研究者の海外の研究機関への就職を目指した。こうした計画は5年間で、若手研究者が国際学術誌等に96本の論文を公刊、論文被引用数(世界標準のThomson Reuters社Web of Knowledgeによる)も総計470回に至った。加えて、若手研究者は、Annual Cognitive Neuroscience Meeting, International Congress of Psychologyを含む8つの国際学会賞を受賞するなどの輝かしい成果を挙げた。これらの国際的研究成果は、College of William and Mary, Michigan State University, University of California Irvineなどの海外の主要大学への若手人材の就職につながっている。</p> <p>3)先鋭かつ集中的研究プログラム</p> <p>本計画では、「心の社会性」に関する世界最先端の最重要研究テーマに資源を集中するため、21世紀COEで大きな成果が得られたテーマ、及び今後の発展が期待されるテーマを中心にプログラムを戦略的に再構築し、3つの先端的テーマ(社会行動の適応的基盤、感情の進化・生態学的基盤、文化の制度的基盤と自己維持的信念体系のゲーム論的分析)に関する、研究チームを軸とする高度の研究教育を展開した。こうした戦略的プログラムは、世界に通用する若手研究者育成の成功に加え、拠点全体で大きな研究成果を生み出すことに成功した。具体的には、5年間で、国際学術誌への170本以上の論文公刊、2500回に上る論文被引用数、事業推進担当者に対する数々の国際的顕彰など、21世紀COEをはるかに凌駕する大きな国際的成果をもたらした。以上の客観的統計は、本拠点の研究活動が、発信数とインパクトの双方において、他の人文系拠点に類を見ない大きな国際的評価を獲得していることを明確に示している。</p>		

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

[国際的にインパクトのある研究成果の発信]

本拠点の所期の目標は、国際的にインパクトのある研究を、大学院生・若手研究者と、事業推進担当者が一丸となって推進することにあった。こうした成果は、*Psychological Review* (Impact Factor: 7.8), *Psychological Science* (IF: 4.7), *Journal of Experimental Psychology* (IF: 5.0), *Journal of Personality and Social Psychology* (IF: 5.2) などの心理学分野の主要国際学術誌、*Current Anthropology* (IF: 2.2) などの人類学分野、*Evolution and Human Behavior* (IF: 4.1) などの人間行動進化学分野、*Public Choice* (IF: 2.5) などの政治・経済学分野、*Proceedings of the National Academy of Science* (IF: 9.7) などの自然科学分野の主要国際学術誌に次々と刊行されてきた。上の括弧内のImpact Factorに示したように、これらの学術誌はいずれも、インパクトの極めて高い世界的なトップジャーナルである。

図4、5に、本拠点からの国際学術誌への論文公刊数の年次推移を示した。図4は、大学院生・若手を第一著者とする論文数の推移、図5は事業推進担当者を含む本拠点全体の論文数の推移を示している。いずれの図からも分かるように、21世紀COEの成果をさらに発展させる形で、グローバルCOE開始後、国際学術誌への発信が順調に伸びている。例えば、図4の若手を第一著者とする国際学術論文の総数は、21世紀COE期間と比べて、ほぼ倍増している。こうした高水準の国際発信は、人文系グローバルCOE拠点の中でも特筆すべき学術的成果であり、「国際的にインパクトのある研究成果の発信」という、本拠点形成の目的が十分に達成されたことを何よりも明確に示している。

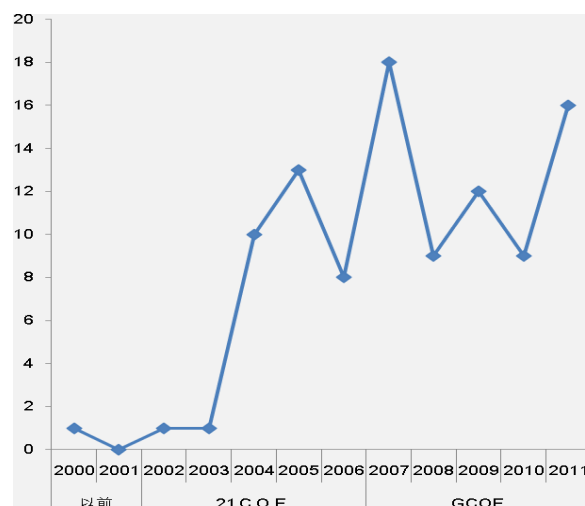


図4 若手研究者の国際学術誌への論文公刊数の推移

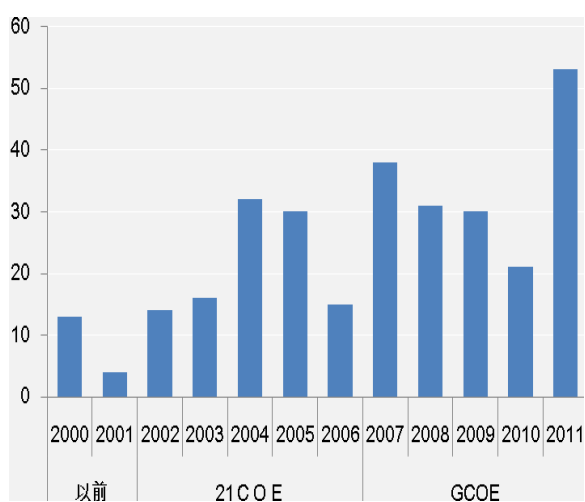


図5 本拠点全体の国際学術誌への論文誌公刊数の推移

[心理学領域における先端研究連携体制(WISH)の構築]

本拠点は、拠点リーダー、副リーダーの学術会議での活動などを介して、「心の先端研究のための連携拠点(WISH: Web for the Integrated Studies of the Human Mind)」の構築に貢献してきた。WISHとは心理学系グローバルCOE拠点を中心とする学術会議の活動であり、高い研究ポテンシャルを持つ国内の主要研究機関が連携し実験環境や実験データを共有するためのネットワーク化設備を導入し、他者とのきずなの中で保たれる「心の健康」についての日本独自の先端研究を統合的に推進しようとするものである。この活動に対しては、2010年度から12年度にかけて文部科学省の最先端研究基盤事業から14億円が措置された。本拠点は、国際競争力をもつ「心理学領域オールジャパン体制」の構築を目指すWISHの中で、「心の科学と社会科学をつなぐ先端的ハブ」(下記参照)として不可欠の役割を果たしている。

[心の科学と社会科学を結ぶ先端的ハブとしての機能]

本拠点の「心の科学と社会科学を結ぶ先端的ハブ」としての機能は、大型/戦略的外部資金の獲得により、若手研究者をプロジェクトに参入させる形で具現化されてきた。科学研究費特定領域「実験社会科学—実験が切り開く21世紀の社会科学」、新学術領域「法と人間科学」、異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学推進事業「意思決定科学・脳科学・法哲学の連携による『正義』の行動的・神経基盤の解明」などの大型/戦略的研究が、拠点リーダーや副リーダーを代表者・班代表としつつ、グローバルCOEプロジェクトと有機的に結びつく形で進化した。こうした活動を通じて、経済学・法学・政治学をはじめとする社会科学領域の先端拠点との間に、若手研究者の交換を含む先鋭な国際連携体制が確立された。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	北海道大学	拠点番号	D01
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称	心の社会性に関する教育研究拠点		
中核となる専攻等名	文学研究科人間システム科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 亀田 達也		外 14 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は十分達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、大学の基本理念に基づき、本拠点形成計画を戦略的なものと位置付け、総長を中心としたマネジメント体制の下で、教育・研究のインフラ基盤を整え、「心の本質的社会性」についての世界最先端の教育研究拠点が形成されていると高く評価される。

拠点形成全体については、本拠点リーダーは、「社会科学実験研究センター」長を兼ね、教育と研究を統括する副リーダーと共に機動的に拠点運営を行い、国際競争力のある大学作りに資することができたと高く評価される。また、国内外の大学との連携は拠点形成の要として有効に機能しており、成果の達成に大きく貢献した。

人材育成面については、正統的周辺参加という若手研究者育成の理念が有効に働き、若手研究者の育成に高い効果をあげた。また、カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センターとの連携は、若手研究者の自主性や国際的情報発信能力などを高め、国際的に活躍する人材の輩出に貢献したと高く評価される。

研究活動面については、「適応とマイクロ=マクロ・ダイナミックスの概念」を軸に独創的なアプローチで「心の本質的社会性」の解明に取り組み、卓越した成果をあげたと評価される。若手研究者を含む多くの研究成果が国際学術雑誌に掲載され、掲載論文への注目度も高く、研究の独創性をうかがわせると共に教育研究の仕組みが十分機能した結果であると高く評価できる。

今後の展望については、本拠点の基盤である「社会科学実験研究センター」の継続が決定すると共に、本センターを中心に人文社会系の国内外研究拠点との連携強化を進めており、世界水準の若手研究者の育成や、研究フィールドの拡大が期待できる。